

2025年1月19日（日）主日朝礼拝説教

『荒野の誘惑』 井上隆晶牧師
創世記3章章1～7節、ルカによる福音書4章1～13節

①【聖霊に引き回される】

洗礼を受けられたイエス様は聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになりました。そして、荒野の中を霊によって引き回され、四十日間、悪魔から誘惑を受けられました。ここで“霊”と書かれているのは「聖霊」のことですから、神様がイエス様を引き回したということになります。引き回すというのは、強引に連れ回すことです。聖霊に満ちた状態というのは、何でも自分の思い通りになることではなく、その逆で自分の思い通りにならないことをさせられ、生きたくない所に行かされ、遠回りの道を行かされる事であって、それに従順に従う事なのです。

②【三つの誘惑】

40日間断食をしたイエス様が空腹になると、悪魔はイエス様に「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ」といいます。イエス様は「人はパンだけで生きるものではない。」（ルカ4:4）と答えられました。人はパンだけでなく、神によって生きるのだと答えられたのです。あなたは自分の力で生きるか、神によって生きるかが問われています。二番目の誘惑は富と権力の誘惑です。悪魔はイエス様に世界の国々を見せ「この国々の一切の権力と繁栄を与えよう。…もしわたしを拝むなら、みんなあなたのものになる。」（同4:7）と言いました。悪と手を結べ、悪と妥協しろ、そうすれば富と権力を手に入れられるというものです。イエス様は「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」（4:8）と言われます。三番目の誘惑は、神を試すことです。悪魔はイエス様を神殿の屋根の端に立たせ「神はあなたの足が石に当たらないように、天使があなたを支える」と聖書に書いてあるのだから、「神の子なら飛び降りたらどうだ。」（4:9）と言います。しかしイエス様は「主を試してはならない」と答えられました。悪魔は聖書の言葉（詩編）も使いながら、神を自分の思い通りにコントロールさせようとするのです。これらの誘惑は、結局は、神から人を離させ、人を神のような存在にさせようという誘惑なのです。最初のアダムも、「神のようになれる」という言葉で誘惑されました。

③【力を手に入れることへの誘惑】

この悪魔の誘惑は弱いメシアではなく、強いメシアになれるという誘惑でもあると言えるでしょう。奇跡を行い、食糧問題を解決し、全世界のものを手に入れる強いメシアになれるという誘惑です。力への誘惑です。ヘンリ・ナウエンは「まことの力への道」という本でこう書いています。

● 「神がこの地上をご覧になるとき、神は涙を流されます。それは力への渴望が人々の心を

捕らえ、人々の精神を蝕んでいるからです。感謝よりも恨みが、称賛よりも批判が、赦しよりも復讐が、癒しよりも傷つけ合いが、憐れみよりも競争が、協力よりも暴力が、また愛というよりは底知れない恐れがあります。」「しかし経済的、政治的な力よりも悪質なものが存在します。それは宗教上の力です。神がこの世界を見られる時、涙を流されるだけでなく、怒りをも覚えられます。というのは、神に祈り、賛美を献げ、神に向かって『主よ、主よ』と叫ぶ人々の内の多くもまた、力によって腐敗しているからです。神は怒りながら次のように言っておられます。『この民は、口先で私に近づき、唇で私を敬うが、心は私から遠く離れている。彼らが私を恐れ敬うとしても、それは人間の戒めを覚え込んだからだ。』（イザヤ 29 : 13)」

●「キリスト教シオニズム」という言葉を聞いたことがありますか？ユダヤ人は世界中に散っていましたが、1948年にイスラエル国家が建国されます。その背景に「キリスト教のシオニズム運動（ユダヤ人の国を造ろうという運動）」がありました。パレスチナはイスラエルに約束された土地であって、先住民のパレスチナ人は悪であって、追い出されるのは神の意志であるという思想です。19世紀にジョン・ダービーは、世界の歴史を七つの段階に分け①墮落前②良心の時代（アダム～ノア）③人間による支配の時代（ノア～アブラハム）④約束の時代（アブラハム～モーセ）⑤律法の時代（モーセ～キリスト）⑥恵みと教会の時代（使徒～最後の審判）⑦神の国の時代（キリストの再臨～千年王国）とします。アメリカの福音派はこれを信じており、イスラエルを支持しています。なぜ支持するかと言うと、ユダヤ人を聖地に帰して国を建てれば世界最終戦争が起き、キリストが再臨して神の国ができると信じているからです。2018年にアメリカ大使館がエルサレムに移されましたが、この式典にキリスト教シオニストの牧師たちが祈りを献げています。イスラエルも、アメリカの福音派も聖書を引用して、植民地政策を正当化しようとしています。イスラエルのガザ侵攻が始まると、2023年12月にフランクリン・グラハムがネタニヤフと会見し、日本のイスラエル大使館に15人の福音派の日本人牧師が訪問し、イスラエル支持を表明しました。

皆さん、これをどう思いますか？力づくで神の歴史を進めようとするのはカルト宗教と同じだと思いませんか。私にはアメリカの福音派、日本の福音派が、悪魔と妥協して神の国を作ろうとしているように見えるのです。

この世を支配し、人間とこの世界を破壊する悪魔的な力に対して神はどのように対応されたのでしょうか。ヘンリ・ナウエンは続けてこう言います。

●「ナザレのイエスという無力な者となって、神は私たちに現れ、力という幻想を取り除かれました。」「神は私たちと何ら異なる事のない人となりました。それは、まったくの無力さによって力という壁を打ち破るためです。」

無力というのは何もしない事ではありません。先日、ミャンマー人の牧師マキン・サンサン・アウン先生の話の話を聞きました。ミャンマーの軍事クーデターは4年になります。軍隊は抵抗する民をつぎつぎと虐殺しています。村を空爆し、頭に花

をつける運動をただで女性たちが連れ去られ、帰って来ません。10代の青年は殺され、臓器売買に売られます。人権などありません。国連も何もしてくれません。ほとんどの教会が破壊されました。武器をもつ多くの兵士の前で、ひざまづいて祈る一人でシスターの写真を見てショックでした。サンサン先生はこう言われました。「神はどこにいるのか？いつ助けてくれるのか？いないのか？いいえ、神は上ではなく、殺される人たちの中におられます。共にいて苦しみを一緒に負って下さっています。」力は二種類あるのです。下からの力と上からの力です。下からの力は、悪魔が与える力ですが、上からの力は神が与える力です。下からの力は破壊する力ですが、上からの力は和解し、一つにする力です。私たちが求めなければならないのは、上からの力です。それは聖霊によって与えられる赦す力、愛する力です。

エステルはペルシャの時代に、ユダヤ人絶滅計画を企む悪人からイスラエルを救ったユダヤ人の王妃であって、教会学校でも人気ですが、ユダヤ人が救われた後、彼女は二日間にわたる復讐をペルシャの王に願い出て（エステル9章）、聞き入れられました。なぜこんな残酷な話が載っているのでしょうか。榎本保郎牧師は「イスラエルに旅した時、第二次世界大戦で虐殺されたユダヤ人の記念堂を見た。小さなボックスに名前が刻まれ、灯がともされていた。同胞の死をいたむ気持ちはわかる。しかしそこを訪れた私は、ユダヤ人の悲劇がまた起こるのではないかと思われた。ゆるされたことを知らない人は、所詮人をゆるすことはできない。」と言っています。キリスト教は、恨みをキリストの所で捨てた人たちです。キリストが私たちに赦してくださったからです。敵を赦すキリストの生き方を私たちは信じます。ジョンとサンディの物語を聞いて下さい。

●ある日、ジョンがサンディに言いました。「ぼくたち、今まで一度もロゲンカしたことないね。他の人みたいにケンカしてみようよ」そこで、サンディは尋ねました。「でも、どうやって始めたらいいの」「そんな簡単だよ。ぼくが積み木を一つ取って、『これはぼくのだ』と言ったら、『ちがうよ。それは私のだ』と君が言えればいいんだ。そうすればケンカが始まる。」そこで二人は座り、ジョンが積み木を一つ取って言いました。「これはぼくのだ」サンディは優しく彼を見つめ、そしてこう言いました。「もしそうだったら、取っていいわ」こうしてケンカは成立しませんでした。

悪魔が差し出す力の誘惑に気をつけましょう。それは「偽りの力」です。「まことの力」とは、神によって与えられる愛の力、赦しの力、他者の為に自分を献げる力です。その力を与えて下さいと祈りたいと思います。